

1990年代前半、ソ連崩壊を利用した攻撃などで厳しい戦いが続きますが、後半は躍進の時代を迎えました。93年衆院選が転機でした。この時は、自民党政権の危機の中で「非自民」を掲げた諸政党が続出、初日のテレビインタビューで「自民か、非自民か」と詰問調で迫られるなど、異常な状態になりました。

《衆院での宮沢喜一内閣不信任決議案可決を契機としたこの衆院選では、鳩山由紀夫氏、小沢一郎氏らが自民党を離党し、新党さきがけや新生党を結成した。自民党は過半数を割り、「非自民連立」の細川護熙（もりひろ）政権が発足した。共産党は90年衆院選から1議席減らしたが、15議席を確保した》

しかし、国民の期待を受けて成立した「非自民連立」の細川政権と羽田孜（つとむ）政権は1年も持たず崩壊し、「自社さ連立」の村山富市政権が続きます。政党の組み合わせは変わっても、政治の基本路線は変わらず、「自民党政治から抜け出す道は何か」という私たちの問題提起が、国民に受け入れられる時代になったと実感しました。

村山政権下、95年参院選では、改選5議席を8議席に増やしました。橋本竜太郎政権で小選挙区比例代表並立制が導入された96年衆院選では、与党と新進党の対決が注目される中、15議席から26議席に躍進したのです。この衆院選は、比例選で有権者に政党名を書いてもらう初の選挙でした。中選挙区制下の93年、個人名投票で得た483万票を超えれば大成功という気持ちでしたが、比例選で726万票を獲得しました。

党本部には「生まれて初めて『共産党』と書いて、手が震えた」といった投書が相次ぎました。98年参院選では比例選で819万票、非改選を合わせて23議席を増やしました。

思いがけないことも経験しました。「共産党の民間企業政策を聞きたい」と、企業の中堅幹部を集めた講演会に呼ばれたり、98年には「スマイリング・コミュニスト（ほほ笑む共産主義者）」の言葉で「新語・流行語大賞」の特別賞を受けたりして、この年は「日本メガネベストドレッサー賞」も受賞しました。



1998年7月の参院選で、当選者の名前にバラをつける不破委員長（後列右）と志位和夫書記局長（同左）

《共産党は97年の第21回党大会で、「21世紀の早い段階で民主連合政府を目指す」との方針を掲げた。この時期の躍進は、96年に社民党に党名変更した社会党の与党化、93年以降の政界再編に伴う混迷から、共産党を一時的に支持する「雨宿り現象」という見方もあった。この間も、党機関紙「赤旗」の部数減が続き、2000年以降の国政選挙では、再び苦戦を強いられるようになった》

躍進の後には、また反共攻撃が強まりました。躍進の時期の得票の大きな部分は、党の手が届いていない層からのものでした。私は「そういう票を、どんな状況でも自分たちの支持票として固めるのが仕事だ」とよく言ったものです。「共産党に風頼みの選挙はない。自分で風を起こす力を持たなければ」は、今も私の口癖になっています。

(政治部 鳥山忠志)

[時代の証言者] 共産党・不破哲三(22) / 宮本議長へ「引退」進言

2010.12.01 朝刊 26頁

1997年の夏、私は東京郊外の宮本顕治議長の自宅に何度も足を運びました。第21回党大会を前に、宮本さんの進退問題について二人だけで話し合うためでした。

「共産党大会が開かれた9月、橋本竜太郎首相が自民党総裁選で無投票再選された。首相はロッキード事件で有罪が確定した佐藤孝行氏を総務庁長官に起用した。しかし、与党からも批判を受け、佐藤氏は辞任。政権の求心力低下を招いた」

宮本さんは94年の第20回党大会前に脳梗塞で倒れ、大会に出席できませんでした。その後、ある程度回復されたものの、議長としての活動はだんだん難しくなりました。97年になると、党中央委員会総会に出席する際、車いすを使わざるを得なくなりました。声を出すのも難しく、見ていてもつらい状態になったんです。

「やはり、もう退任される時期だろう。88歳という年齢の問題もあるが、今の健康状態で議長を続けるのは、党にとっても、宮本さんにとっても適切ではないのではないかと考えました。

ただ、この問題をいきなり会議で議論するわけにはいきません。やはり、ご本人がウンと言わなければやれないことです。5月の中央委総会で党大会の日程を決めた後、私は宮本さんと話し合いを始めました。

結論が出るまで時間がかかりました。宮本さんが「分かった」と言われたのは、9月に入って間もない時期です。戦前から一貫して党中央で活動してきたただ一人の幹部ですから、色々な思いがあったのでしょう。

東大時代に初めて顔を合わせてから、五十年近くです。64年に党本部に来てからは、宮



本さんと三十数年間、一緒に活動してきました。仕事を離れても、夏にはお互いに家族を連れ、伊豆で海水浴をしたりする間柄でした。私の方から退任問題を持ち出すのはつらいことでしたが、委員長として党運営には責任がありました。立場上、私しか切り出せる者はいませんでした。

《党大会で宮本氏は名誉議長となり、共産党は名実ともに「不破委員長－志位和夫書記局長」体制に移行した。宮本氏は2000年に名誉役員となり、07年7月、98歳で死去した。宮本氏については、戦前の「スパイ査問事件」の影も引きずったとの評もあった》

宮本さんのように、戦前の党と戦後の党のつながりを体現した人は得難いんです。私は宮本さんの獄中書簡や法廷闘争記録をよく読みました。共産党の存在自体が非合法とされた戦前の苛烈な状況の中で戦った宮本さんがいなかったら、戦前の党に投げられた誹謗（ひぼう）中傷を、私たち戦後の人間が過去にさかのぼってぬぐい去ることはできません。

宮本さんの党葬での弔辞でも述べたように、戦前の闘争、「50年問題」や中ソの干渉問題で示した指導力は、危急の時期に党の存立を勝ち取った大きな功績だと思っています。

（政治部 鳥山忠志）

[\[時代の証言者\] 共産党・不破哲三（23）／誤り認めた中国共産党](#)

2010.12.02 朝刊 24頁

1997年、長らく関係が断絶していた中国共産党から、関係回復の意向を示すサインがいくつか伝わってきました。そして12月、党中央対外連絡部の戴秉国（たいへいこく）部長（現国務委員）が「人民日報」のインタビューで、新しい年の課題の筆頭に「日中共産党の関係正常化」を挙げたのです。

「中国側の第一歩だ」と感じた私は、98年1月の党旗開きで関係正常化について積極的対応をしたい」と発言しました。

《当時の中国は江沢民国家主席（党総書記）体制下で、「改革・開放」路線を推進していた。98年には、江主席が中国の国家元首として初めて来日。自民党などは中国との関係を保っていた》

我々にとって、問題は中国が過去の党分裂工作など干渉の誤りを認めるかどうかにあります。80年代に中国側の申し入れで正常化の交渉をした時は、中国側が「過去は水に流そう」というだけで干渉の事実を認めませんでした。

1月中旬、対外連絡部の代表団が来日し、私たちの党本部を訪ねてきました。彼らは「反省している」と言いましたが、それは64年に上海で行った毛沢東との会談決裂を指していました。しかし、会談で意見が合わないことは、独立した党の間ではあり得ること、私が「問題はその後にある。決裂後の干渉が問題なんだ」と話しても、その事実を全く知らないのです。



中国を訪問し、胡錦濤国家副主席（右）と会談する不破さん（左）＝1998年7月

彼らは帰国後、我々の考えを指導部に報告したようです。指導部は毛時代の干渉とは縁がなく、文化大革命期には地方に追われていた人が多いのですが、日本共産党との関係を自分たちなりに調べ始めたようです。一方、「しんぶん赤旗」の北京支局を開設したいという我々の申請への中国側の対応も、迅速なものでした。

4月に胡錦濤国家副主席（現国家主席）が来日した際、私は歓迎レセプションに出席しました。関係断絶以来、初めてのことでした。この時、紹介役を務める人が誰もいなかったのですが、閉会間際にあうんの呼吸で接近し、あいさつを交わしました。中国側の随員がとっさに手持ちのカメラで撮影し、「歴史的瞬間が撮れた」と喜びあったと、後で聞きました。

6月に北京で行われた日中両党の公式会談で、中国側は文化大革命以来の干渉の事実を認め、「真剣な総括と是正の態度」を確認事項に明記するなど日本側の要求を受け入れました。7月には私が訪中して江沢民主席らと会談し、関係を正常化したのです。

過去の誤りを反省する中国側の態度はきっぱりした、政治的誠実さを示したものでした。7月の両党首脳会談で、私は「日中関係の5原則」を提唱しました。

また、89年の天安門事件について批判し、「言論による体制批判には言論で対応するという政治制度への発展を展望してこそ、その体制が社会に根を下ろしたといえる」という問題提起も率直に行いました。

（政治部 鳥山忠志）

【時代の証言者】共産党・不破哲三（24）／独自外交「当たって砕ける」

2010.12.04 朝刊 29頁

私たちの「野党外交」は中国との関係正常化が転機となりました。アジアでは中国の存在が大きいから対中関係に決着をつけ、野党外交に乗り出したのです。

最初は、1999年に訪れたマレーシアです。私たちが非社会主義国の政府を訪問するのは初

めてだし、相手も共産党代表団を受け入れたことはなかったようで、大使館と折衝してもらちがあきません。

同行した緒方靖夫参院議員（現党副委員長）には「相手方の対応も分からないまま、委員長が行くのですか」と言われました。私は「当たって砕けろ」という気持ちでしたが、実際は「打てば響く」感じで、外務省首脳らとの会談では話が弾みました。

マレーシアは民族構成が複雑です。「国内で融和に苦勞しているから、平和の問題でもよく考えた外交ができるんだね」と言うと、「そこまで分かってくれるのか」と喜ばれました。

次の訪問国は 2003 年のチュニジアでした。政権党の招待で党大会に参加し、サハラ以南のアフリカ諸国と交流できました。



マレーシアを訪問中の不破さん (1999年9月)

イスラム諸国との交流は 02 年、党代表団のサウジアラビア訪問が節目となりました。サウジは歴史的に共産主義への警戒感が強く、ソ連や中国とは 90 年代まで国交もありませんでした。

91 年の湾岸戦争当時、我々が東京の大使館に意見書を持って行くと、大使が「共産主義者とは同席せず」と発言したほどでした。本国ではその後、日本共産党を徹底的に調べたそうです。

イスラム諸国との関係では、私たちがソ連のアフガニスタン侵攻に反対し抜いたことも連帯の要因となっていますが、「価値観の異なる諸文明の共存」が大事だと思っています。今年の党大会に来たあるイスラム国の女性外交官に礼拝用の部屋を確保したことが、イスラム外交団の間で話題となったと聞きました。欧米諸国はこうした点の理解が足りないように見えます。

活動の中で感じたのは、日本の政党の多くが「内向き」ということです。

《2000 年、アジア諸国の政党の与野党を超えた交流を進める「アジア政党会議」が、フィリピン・マニラで第一回会議を開いた。以後、2、3 年に 1 度開催されている》

私たちは 02 年のバンコク会議から参加し、04 年の北京会議には私が出席しました。35 か国、80 以上の政党が参加し、私は 30 近い国の政党の人々と意見を交わしました。政党による外交の貴重な舞台なのです。

でも、日本の他の政党は顔は出しても、各国の党と交流を深めようという姿勢は感じられ

ない。他国からはいささか奇異な目で見られているとも聞きます。

私たちは東京にいる外交団との交流も重視しているのですが、大国以外のレセプションなどで他党の政治家の姿を見ることは少ないんです。これも日本政治の内弁慶ぶり、大国中心主義の表れかもしれません。

(政治部 烏山忠志)

時代の証言者 不破哲三 (25) 党首討論で「核密約」追及

2010.12.06 朝刊 13 頁

小渕恵三政権時代の 1999 年 11 月、国会で初めて党首討論が行われ、翌年の通常国会から制度化されました。私の持ち時間は 9 分でしたが、首相と一対一で討論する得難い機会です。質問の仕方を考えた末、「大きな問題の核心をなす 1 点に絞る」「代理答弁は出来ないので不意打ちの質問はしない」などと、私なりのルールを決めました。

最初の討論では、茨城県東海村の原子力事故に関連し、原子力行政の問題を取り上げました。直前の衆院代表質問でもただしていたので、首相側には「続きをやるからね」と言っておきました。ところが、その答弁の確認のつもりだった最初の質問で、小渕さんが立ち往生してしまい、こちらも困ってしまいました。

2000 年の通常国会では、日米両政府の「核密約」問題に焦点を絞りました。

この問題は 1980 年代から追及し、密約の存在を示す米側文書を発見したものの、その先には進めませんでした。しかし、この年の初め、米国立公文書館の公開文書から重要な発見がありました。60 年の日米安全保障条約改定時、核を搭載した米艦船が事前協議なしで日本に寄港することを容認する「密約文書」と、その当時は今と違って毎週のように党首討論がありました。短い時間でも連続してやれば全容を明らかにできる。3 月から 4 月にかけて、4 回続けてこの問題を取り上げました。3 回目の後に小渕さんが倒れ、最後は森喜朗首相が相手でした。

この時も不意打ちはせず、事前に資料を渡して「研究してほしい」と言いましたが、答弁は「密約は存在しない」の一点張り。米側文書については「関知しない」「調査しない」「米側に問い合わせるつもりはない」です。その根拠は過去の政府答弁だけでした。



党首討論で核密約に関するパネルを掲示し、森喜朗首相と討論する不破さん (2000年 4月)

外務省にはこの局面を予想し、「米側文書が出てきたら、過去の答弁は通用しなくなる」と懸念した高官もいたそうです。その声も届かず、自民党政権は国民を欺き続けたのです。

《核密約問題で民主党政権は昨秋、外務省に有識者委員会を設置した。3月に公表された報告書は、不破氏が追及した「密約文書」の存在は認めたが、「2国間の合意があるのに国民が知らされないまま義務や負担を引き受けること」と定義づけた「狭義の密約」には当たらないとし、「暗黙の合意」があった「広義の密約」と結論づけた》

私は政権交代後、党首討論で示した諸文書を提供しましたが、報告書は「日本側に本当の意味は知らされていなかった」という内容でした。すぐ記者会見を開き、米側が改定時に密約の内容を具体的に説明したことを示す米側文書を発表し、政府にも渡しましたが、今日まで音さたはありません。

自民政権は「知らぬ存ぜぬ」を通しました。民主党政権はいわば「見て見ぬふり」をしている。どちらも不誠実な態度だと思っています。

(政治部 鳥山忠志)